PC 80

児童期から前思春期にかけての愛着表現（2）
～親子状況ビクチャー（PARS）による学年差の検討と親子間の比較～
○久保 恵
（四天王寺国際仏教大学）（京都大学）

【問題と目的】
親子状況ビクチャー（PARS）とは、刺激観にて物語作成課題を通じて、個人に内在化された愛着表現を測定する投影法である。青少年期において、PARSの反応の個人差と、自身の親子関係体験と想起様式の個人差との関連が認められた（久保、2000）。対象年齢を拡大してPARSを施行するためには、年齢ごとに標準的な反応を整理し、分析基準を標準化していくことが必要である。松浦・久保（1999）は、小4から中2を対象に、小説の反応特徴を繰りかみのえる分析作業を検討した。しかし、学年差が大きいと感じられたため、本研究では、小4から小6における学年差を検討することを目的とする。さらに、保護者にもPARSを施行し、成人の結果も比較検討する。

【方法】
＜対象＞A市内の小学生130名（小4 57名、小5 22名、小6 51名）と保護者33名。
＜手続き＞母子3、父子3、分離再会の計8図版（PIC6、5は個人差の識別に適否と判定し除外）からなる親子状況ビクチャーについて、年齢、登場人物の気持ち、話の続きを自由に記述させた。小学生は集団で、保護者は個別（回答後は封）で施行し担当者を通して回収した。

＜結果と考察＞
状況の典型性、親子それぞれからの発信的種類とその感情のトーン、文脈の連続性について、43カテゴリーからなる分類基準（松浦・久保（1999）をさらに改良）に従って、個人の各図版への反応がどれにあてはまるかを評定した。次に、各図版の評定結果について、対象年代ごとに数値化の基準による分析を行い、評定値の分布のまとまりに基づいて、反応パターンを分類した。年代ごとに、特徴的な反応群として抽出された結果を比較すると以下の通りである。

＜PIC1＞「ミルクを求めて応答」②「葛藤のない交流」③「交流における葛藤」として「親の負担感」が5・6年に、「子の拒否」が6年に出現。

＜PIC2＞①「葛藤のない交流」②「子は世界に関心」（保護者は①＞②・小生は①＜②）。③「親の負担感」は、保護者では関係の中で解決、小生では親の意向通りになるという文脈。

＜PIC3＞①「子はボールに関心」②「子は親との交流を喜ぶ」が中心。③「子の拒否・対立」は小学生にのみ出現。さらに④「親の負担感」は4年年に認められた。

＜PIC4＞①「子はテレビに関心」が中心。②「交流場面」は保護者のみに、③「立つ練習」④「親の負担感」は4年年に出現。

＜PIC5＞①「母子分離」と②「出会い」に場面設定が大別。③「交流における葛藤」として、保護者に「親の拒否」、4年に「親の観察、事態の悪化」、5年で「親の否定的傾向」、6年で「叱られ場面、親の怒り、事態の悪化」が現出。

＜PIC6＞①「親が接近、交流」が中心。6年で、葛藤のある交流①「歩く練習、親の意向、子の否定的傾向」が分化。②「子が転ぶ」は保護者のみに出現（小生では少数反応）。③「子が怒る」は6年にのみ出現。

＜PIC7＞①「留守番」と②「テレビ観賞」に場面設定が大別（保護者は①＜②・小生は①＞②）。保護者と5年では、①「子を求める、親は心配」と①「子は退屈、親の気持ち無記入」が分化。

＜PIC8＞①「再会場面」が中心。小生では①「追いとした再会」が分化。②「肯定的な感情表現」は保護者に、③「子の否定的傾向」は4年にも、④「親の気分」は5年に出現。

以上、保護者は親役割的・肯定的な反応群が多く、小生は高学年ほど反応の分化が示された。今後は、各反応群と他の測度との関連を検討することが課題である。※久保（2000）心理学会研究,477-484・松浦・久保（1999）教育心理学会,734